

「子どもとケータイ、
年の功フィルタリングを發揮して」

その実際と取り組み

熊本県南小国中学校 桑崎 剛

一 はじめに

本年1月末、文部科学省の講堂にて、「ネット安全安心全国推進フォーラム」が開催されました。「子どもとケータイ・適切な使い方のためのルールづくりを」と題して、二つのパネル討議を中心に、有識者に加えて、高校生・大学生のパネリストたちも積極的に発言をしました。第一部の中で、高校生パネリストが「ケータイはさらっと使うくらいでちょうどいい。」という発言がありました。また、私がコーディネートをつとめた第二部では、パネリストの漫画家 倉田真由美氏から、「人間のフィルタリング、大人の年の功が大切である。」との発言もありました。子どもたちの携帯電話については、近年、連日のようにテレビ、新聞で報道がなされ、社会問題化しつつあります。そして、今年になり、所持の割合やその利用における実態等の詳細が、文部科学省や市町村教育委員会、民間研究団体などの調査で、やっと分かりつつあります。そんな最中のフォーラムではありましたが、二つの発言はこの本質をみる思いを感じました。

二 世界ケータイ、日本のケータイ

携帯電話の利用において、日本での利用の様子は世界のそれと大きく異なります。海外旅行で訪問する外国では、電車やバスの中で、乗客がメールを打っている姿や、繰り返し放送されるマナーを呼びかける放送は一切なく、日本の様子と大きな違いがあります。実はこのような状況は日本の特徴でもあります。日本の携帯電話は、通話機能の他、メール機能、ウェブ機能などとはもとより、カメラ機能、お財布機能など、実に多様化し、世界一高性能で多機能なツール、いわゆる「ケータイ」と表記される機器になっています。(以降、携帯電話のことを「ケータイ」と表します。)

ある人が、一日の中でケータイを持たない時間は？という問いかけに、30分と答えました。そう、お風呂の時間です。体の一部となつている人が多いのも日本の特徴です。

民間の研究機関が、昨年、まだケータイを持たない小学校1年生に、ケータイについて、イメージ調査をしました。

「ケータイって何ですか？」の問いに対し、メールが出来る、写真が写せる、ゲームが出来る、などに続き、「電話も出来る」という回答が5番目だったそうです。6〜7歳の小学校1年生が、物心がついた4〜5歳から、この2年間に自分

の周りの大人たちや、高校生・大学生のお兄ちゃん、お姉ちゃん達が、ケータイでメールを打っている姿やウェブを利用してしている風景を多く見てきた結果だと思えます。

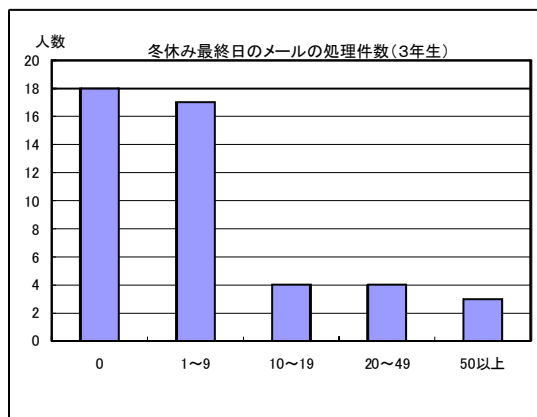
日本のケータイ使用の特徴に上げられるのが、まずメールとウェブの利用です。ケータイ普及率が世界1位のフィンランドでは、ケータイの利用はほとんど通話で、メールやウェブの利用は、ワイヤレスLANの発達もあり、パソコン(PC)が中心です。無論、ケータイでも利用出来るのです。他のヨーロッパ諸国やアメリカでもほぼ同様の状況です。日本と一部のアジア諸国がメールとウェブをよく利用しますが、本校のアメリカ・ニューヨーク出身のALT(英語指導助手)に聞くと、PCで出来るのに、なぜ、あんなにキーが小さなケータイでメールを打つか理解できないと言います。また、メールは利用しても、必ず、約束事には、直接、電話をして肉声で確認をする、とも言います。

日本のケータイのメール機能やウェブ機能は、2000年頃から急速に普及し始めました。そして、ついに、2007年にPCによるネット利用者は、ケータイによるネット利用者数に越されました。日本におけるメールやネット利用の割合が、PCではなく、ケータイが中心という世界でも驚くべき特別な国となりました。

三 保健室から見えること

私が勤務する南小国中学校で、今年1月の冬休みの最終日における3年生46名のメールの

処理件数を保健室の養護の先生が調査したところ、図の様になりました。南小国町は全国から毎年100万人もの観光客が訪れる「黒川温泉」を有し、政令指定都市への移行を目前に控えた熊本市からは1時間以上も離れた山間の落ち着いた町です。町内にはケータイ・ショップは一軒もありません。子どもたちのケータイ所持は都市部よりは低位にはありますが、その利用に



関する実態はさほど変わりなく、深夜までのメール利用により、早朝から保健室を訪れる生徒の実態も、程度の差はありますが都市部とあまり変わりません。

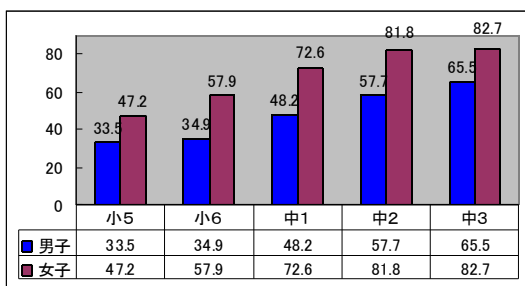
特に最近、女子生徒の間

では、「オヤスミ・メール」という深夜の「行事」が子どもたちに悪影響を与えている現状があります。仲のよい数人の友だちの間で、相互に、「オヤスミ・メール」を絵文字つきで、送信・返信しあうといった、際限のないメールの往復になり、そのために睡眠不足になっていると予想されます。このことは、南小国中学校のみならず、全国に約4万室あると言われる学校の保健室のあちこちで見られる現象だと思われれます。

そして、子どもたちにとつては、お休みメールをどの様な方法で中断するか、という重要な緊急の課題があります。「家族の決まりで〇〇時以降のメールは禁止されているから」など、メールを中断するためのノウハウを編み出す必要があるとも聞きます。また、一方では、「十二時以降の深夜のメールは非常識・迷惑」との認識を持ちつつも、思春期特有の友達関係から、その対応に苦慮する生徒の様子が浮かびます。

そこから子どもたちを救うにはどうすればよいか？ 情報モラルの育成のための取り組み、とりわけ、コミュニケーションのあり方について、周りの大人たちからの適切な指導が最も必要です。

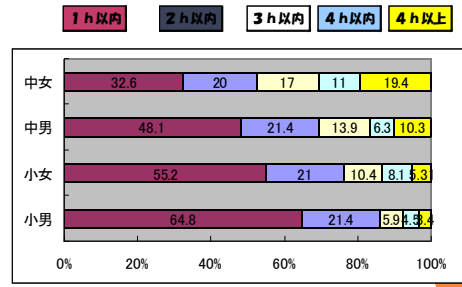
携帯電話を持っていますか？



ケータイの所持について、大阪府寝屋川市教育委員会の調査によると、所持について、あるいは、メールの件数や一日の利用時間について、男女に明らかな有意差が

あり、ほとんどの項目で女子が20%近く高い数字となっているとのことです。(図参照)

一日にどれくらい携帯を？



特に利用時間については、メールによる時間が多くを占めると予想され、同調査によると、男子のメールは10通未満が一番多いのに対し、女子では30通以上が50%以上もあります。一つのメールに5分を要したとして、150分、2時間半もの時間を浪費することとなり、「勉強に集中できない」との指摘も女子生徒からしばしば聞きます。ケータイの問題は、特に、女子生徒の問題だとも言えます。

四 購入動機については

日本の子どもたちがケータイを購入する際の動機として、「ケータイが欲しい」というのがあります。先日、熊本で開催された「性教育の学会」において、熊本県内の中学校の養護教諭の先生からの発表で、ケータイの購入動機は、「家族との連絡のため」という一番目の理由に続き、「みんなが持っているから」という回答が二番目として、ほぼ、四分の一もあつた、との報告がありました。小学生ならともかく、中学生の購入動機としては、いささか驚くとともに、そ

の購入動機をもとに、実際に購入をしている保護者の姿があります。

知人の駐ドイツ日本大使館のハンブルグ領事から、「ドイツの子どもがケータイの購入を親と相談するとき、なぜ必要かの理由をしっかりと説明する。誰ちゃんが持っているからという理由は聞いたことがない。」とのメールを頂戴しました。私は、このことはとても重要視しており、この、購入における自己責任の有無はとても重要だと思っています。

「ケータイが欲しい」と「ケータイが必要」は大きく大きく異なります。「欲しい」と「必要」はイコールではありません。友だちが持っているから、というのも購入動機にはなりません。ドイツをはじめとする欧米で、ケータイの普及が高い割に、子どものケータイの問題が社会問題化しないことの理由には、前述した通話が中心ということもありますが、子どもたちはケータイが「必要な理由」を、そして親は自分の子にとって所持は「適切か」を、しっかりと議論するからだと思えます。購入に際しては、よその子が持っているからという横並び意識や、成績が何番上がったから、部活動で勝ったから、お誕生日だから、高校に合格したからというご褒美的な要素はなく、購入目的が適切で明確です。そして、その議論は、使用する子どもに自己責任を発生させます。日本にも「我が子にとって購入は適切か」という最も大事な考えを浸透させていくことが急務です。

私は、「ケータイ契約書」というタイトルの学習シートを利用し、ケータイを購入する目的や、

利用する場所や時間、利用するウェブサイト、料金の支払い方法などを考えさせる実践に取り組んでいます。そして、その学習シートは学習後、家庭に持ち帰らせ、保護者と話し合いをする様に指示しています。実践を重ねれば重ねるほど、購入の動機や目的を考えさせることが、その後の利用に大きなプラスを生じさせると確信しつつあります。

五 家庭でのルールづくり

多くの調査で、保護者は「利用料金」については関心が高く、制限を設けている例が多いのですが、ケータイを利用する場所、相手、時間、利用するウェブサイトなど、最も大事で根本的な事柄については、ルールづくりが出来ている例は少ない状況です。民間の研究機関の調査では、家庭での利用に関するルールで、「特に決めていない」という回答が実に55.4%もあり、無論、No.1です。購入はしたけれど、その後の利用に関しては子ども任せになっていると言えます。韓国では、親が子どものネット利用を遠隔操作で監視するソフトが大ヒット商品となっています。また、山形大学の加納准教授からは、アメリカの多くの保護者は、ケータイ、パソコンに限らず、子どものネットやメール利用の履歴を、閲覧・監視している保護者が大半だと聞きました。これは日本から見ると驚くべき事で、自由の国アメリカ、子どものプライバシーを尊重するアメリカでさえも、親の責任と義務はそれに勝るといふことを意味します。そして、重

篤な社会犯罪を扱う連邦捜査局FBIは全米の保護者に対し、「ネット社会から子どもを守るための一番の方策として、各家庭ではリビングでのネット利用」を強く推奨しています。子ども部屋に持ち込み、コミュニケーションの方法や相手が見えにくくなるのではなく、背中越しに子どものケータイ利用をしっかりと見守りましょうという提唱です。

「子どものケータイを見守る」ということは、換言すれば「子どもを危険やトラブルから守る」ということでもあります。フィルタリングという機械的な安全装置は、子どもの場合は必ず必要ですが、大人がしっかりと見守るといふ人間フィルタリング・安全装置は、前述した倉田真由美氏の発言の様に、それにもまして必要です。

警察庁で検討された審議会「バーチャル社会のもたらす弊害から子どもを守る研究会」の報告書で提案された「家庭でのケータイ利用に関するルール」の例として以下が報告されました。このルールは決して子どもたちに押しつけるのではなく、親子で十分話し合いの上、納得いく「我が家のルール」を作ることが肝要だと思います。一番目にはFBIと同じことが提唱されています。その他、最低限必要な大事なことのみを絞って提案されています。

是非、参考にしていただき、我が家のルールづくりをおこなっていただくとともに、その議論を通して、親子の「生」のコミュニケーションをお願いたいと思います。

- ・ 自宅内では居間で使う
- ・ 食事中や懇談中、深夜には使用しない

- ・ 一定の金額以上は使わない
- ・ 学校での使用は、学校のルールに従う
- ・ 他人を傷つけるような使い方をしない
- ・ 知らない者からのメールが来た場合は速やかに親に報告する
- ・ ルール違反や日常の生活に支障が生じている場合は利用を停止する

六 最後に

ケータイの購入や毎月の使用料はほとんどの場合、保護者の責任のもとにおこなわれていると思います。これは、親が子どもにケータイを貸与している状態です。堅苦しく言うと、契約者であり、所有者である親は、子どものケータイについて、どのような使用がされているか、きちんと管理し、把握しておく義務があるということになります。そして、そのことを親子でお互いが自覚していることが何より大事です。

ところが実際は、子どもは所持してしまうと、自分の世界ができ、何でも自分で出来ると思うようになり、親は、最初に約束したのだから、ちゃんと使うだろうと、お互いが勝手な解釈になり、最初の約束がどんなものだったか忘れてしまうことがしばしばです。

文部科学省や民間研究団体の最近の研究で、「情報モラルの学習をした生徒とそうでない生徒」、「家庭でケータイ利用のルールがある生徒とそうでない生徒」、「親が子どものケータイ利用について、関与している家庭とそうでない家庭」との間には、子どものケータイ利用に関して、強い相関が認められるとの研究成果を多く見か

ける様になりました。例えば、「チェーンメールがきた場合、他の第三者に転送しますか」という問いに、前者の子どもたちは「ノー」の割合が高く、後者の子どもと2割程度の差があります。他に、「勉強中は使わない」や「禁止されている場所では電源を切る」などの質問、あきらかな有意差が認められます。学校や家庭での情報モラルの学習がいかに大切かを物語ります。

先のフォーラムでは、あるパネリストから、「乳幼児の授乳の際、母親は赤ちゃんの様子をしっかり見守らなければならないのに『ケータイでメールをする親』が急増している。むせたり、喉に詰まらせたりしないか、上手に飲んでるかを監視するのが親の責任なのですが。」との報告がありました。実によく見かけるシーンです。

子どものケータイの問題は、実は親である保護者の問題でもあります。日本の子どもたちが、将来、世界一、賢いケータイ・ユーザーとなるためには、その大前提として、保護者のケータイ利用も賢くする必要があります。

中学生・高校生は、周囲から離れ、心理的な自立に向けた準備を進めるいわゆる「思春期」です。友人関係を中心に社会性を育む時期でもあります。生徒自身が、「こういう使い方は危険だ、してはいけない」、「今日はケータイを止めて勉強に専念しよう」など、自発的にコントロール出来るようになることが最も肝要です。

子どもたちの自立・自律のため、学校、家庭に求められる新たな資質「情報モラル」の熟成が、学校教育、社会教育、家庭教育のあらゆる分野で積極的に展開されることを願います。